

現代トルコ文学の魅力——その眺望と知られざる側面

現代トルコ文学概要

勝田 茂*

トルコ文学は、トルコ民族のイスラーム化によりアラブ文学やイラン文学の強い影響を受けて育まれた。これら中東を代表する三文学は、19世紀中葉のほぼ同時期に西洋近代の衝撃として新たな文学ジャンル「小説」を受け入れ、それぞれが新たな精神的模索を始めることになった。

一方、日本における中東文学の受容状況に目をやると、トルコ文学は、2006年のノーベル賞作家オルハン・パムク（Ferit Orhan Pamuk, 1952-）の快挙はあったものの、やはりアラブ文学やイラン文学に比べ認知度が低いのは否めない事実である。こうした立ち後れを少しでも解消するため、またトルコにおける活発な文学活動の一端を紹介するために、本特集ではトルコ文学の魅力について論ずることを試みた。

本特集では、以下の各論によって、日本で知られている作家および詩人の、日本での知られ方とトルコにおける位置づけの違いを明らかにし、また日本では知られていないがトルコでは避けて通れない作家を取り上げ、現代トルコ文学を歴史的に概観できるようにした¹⁾。

勝田茂「現代トルコ文学概要」

勝田茂「トルコ農村文学の系譜——アナトリアの生活者からの叫び——」

石井啓一郎「獄中からの恋歌——ナズム・ヒクメットとイスラーム神秘主義——」

宮下遼「トルコのポスト・モダニズム文学——オルハン・パムクとその周辺——」

石井啓一郎「ヤシャル・ケマル、土着的「チュクロワ人」作家に関する簡潔な考察」

導入として、序文にあたる本稿では、「トルコ文学概要」について簡略ながら述べることにしたい。2点付した参考資料のうち、資料1は「トルコ主要作家年表」、資料2は「トルコ文学邦訳<市販本>一覧」である。なお資料2の一覧表に記載されたもの以外にも大学機関や論文等で抄訳されている作品も若干存在するが、ここでは市販されて一般でも入手可能な邦訳書に限って記載した。

資料1では、トルコ文学の歴史、より厳密にはトルコ共和国における現代文学の発展を概観するにあたり、オスマン帝国末期からトルコ共和国にかけての100年余りの期間、つまり1890年から2000年までの期間における主要な出来事を数直線上に取っている。この中で文学史的に確認しておきたい非常に重要な出来事が三つある。

第一は1923年のトルコ共和国の建国である。その前史として、トルコ民族の存亡を賭した熾烈な民族解放戦争があり、これに勝利を収めたことは、多くのトルコ人にとっては自己存在の原点ともいべき出来事であって、トルコ人アイデンティティやナショナリズムとの関連で文学においても大きなテーマとなる。

* 大阪大学大学院言語文化研究科教授

1) 本特集は2012年6月30日に早稲田大学で開催された公開講座「現代トルコ文学の魅力——その眺望と知られざる側面」の講演内容をもとに加筆・修正を施したものである。

二番目に確認すべき出来事は、第二次世界大戦後、1950年における政権交代である。共和国建国以来アタチュルクの主導で世俗国家建設を推進してきた共和人民党政権が総選挙で民主党に敗れたのが1950年であった。このことは、文学においてアナトリアが対象化される「農村文学」の誕生に大きな影響を及ぼすことになる。

第三番目は、時代がさらに下った、ごく最近の出来事である、2006年のオルハン・パムクのノーベル賞受賞である。これはトルコ文学が一気に世界的に注目される契機となった。そのインパクトは、日本におけるトルコ文学作品の翻訳状況の変化にも明白に反映されている。資料2に明らかであるが、トルコ文学の邦訳点数が、1956～2003年のおよそ50年間で10点余りに留まっていたのに対し、2004～2012年のわずか8年間で一部重複を含むもののほぼ同数の10点、そのうち2点の別作家の作品を除けば、8点がオルハン・パムクの作品であるのには、ノーベル賞受賞の衝撃力の大きさをあらためて思い知らされる。

資料1を参照しつつ、「トルコ文学概要」について詳しく見ていきたい。略式年表の下に、主要作家10名とその主要作品を生誕順に並べて記し、各作家には便宜的にアルファベットa)～j)を付した。

a)のハリデ・エディプ・アドゥヴァル (Halide Edip Adıvar, 1884–1964) と b)のヤクプ・カドリ・カラオスマンオール (Yakup Kadri Karaosmanoğlu, 1889–1974) は、ともにオスマン帝国末期の生まれであるが、本格的に作家として活躍するのは、トルコ共和国時代に入ってからといえる。共和国の初期においてトルコ文学で描かれた舞台は、基本的にはやはり文化的重要性を維持したイスタンブルに限られていた。このことは、アンカラへ遷都した新生トルコ共和国にあっては、政治的にアナトリアを基盤とした国家建設が標榜されたにもかかわらず、作家たちの問題意識は依然として旧帝都イスタンブルにあったことを物語る。しかしながら、その一方で新たな流れとして、イスタンブルから脱却してアナトリアを対象化する兆しも見られた。

したがって、共和国初期の作家たちの中から、作品においてアナトリアにコミットする作家が出てきたことは極めて重要なことであり、その先鞭をつけたのが、先述の二人の作家アドゥヴァルとカラオスマンオールであった。もちろん、この先駆的な作家の全ての作品がアナトリアを対象としたものではなく、むしろ、そういった作品はかなり限定的といえる。にもかかわらず、それぞれの作家がアナトリアを対象とした作品を執筆したことは、次代を担う先見性の証しと見なすことができるのである。

アドゥヴァルは、『試練』(Ateşten Gömlek, 1922)において、カラオスマンオールは『よそ者』(Yaban, 1932)において、小説の舞台をアナトリアに設定している。前者は共和国建国前年の出版で、民族解放戦争における祖国愛をほぼリアルタイムに描き、後者は建国10年目を迎える節目の時期に、トルコ人アイデンティティの欠如を鋭く問いかけた作品である。詳しくは、本論に続く「トルコ農村文学の系譜——アナトリアの生活者からの叫び——」で述べる。

アナトリアにコミットした共和国初期の作家を育んだ背景について、以下に言及しておく。近代的な高等教育機関は、イスタンブル(アドゥヴァルの場合)やエジプトのアレキサンドリア(カラオスマンオールの場合)といった大都市でしか存在しなかった。そこで近代的教育を受けた若者が徹底した英語もしくはフランス語教育を受け、西欧文化・文学にダイレクトに接する機会を得たことは作家の人生観や人格形成に大きく寄与したと思われる。また、アドゥヴァルがこの時代においてトルコを代表する女性作家として活躍し得たのは、早くから女子教育に携わり、それによる社会的、政治的貢献が評価されたからであろう。トルコ文壇に女性作家が本格的に登場するのは一般的

には1970年代以降であることを考えるならば、個性豊かな彼女には新生トルコ共和国を象徴する女性作家に対する大いなる期待が寄せられていたといえるだろう。

作家とアナトリアとの接触、あるいはアナトリアが文学作品で対象化されるという出来事は、究極的にはごく限られたイスタンブル出身作家の社会改革理念に委ねられていた。従来イスタンブルを中心とする大都市ではアナトリアに対するネグレクト感が存在していた。アナトリアの住民は粗野で無教養な農民もしくは遊牧民であり、国家との関係において彼らは徴税、徴兵の義務を一方的に課された存在にすぎなかった。

このようにアナトリアは無視され続けたのであるが、その住民の本格的な代弁者が出現するのは、1950年における政権交代を待たなければならなかった。1950年以降、アナトリアから作家が出てきたということはトルコ文学史上特筆すべき出来事なのである。

アナトリア農村出身の代表的な作家として、g) タリプ・アパイドゥン (Talip Apaydın, 1926-)、h) ファキル・バイクルト (Fakir Baykurt, 1929-)、i) マフムト・マカル (Mahmut Makal, 1933-) の名を挙げることができる。彼らアナトリアを代弁する作家が誕生するには以下のような社会背景があった。共和国建国の父アタチュルクは、政権を担う共和人民党とともにアナトリア農村の改革に着手し、1930年代には「国民の家」、「国民の部屋」といった成人を対象とした啓発組織を通じて農村社会の改革を推進した。やがてそれは斬新な学校教育を通じてアナトリア農村開発、アナトリアを基盤とした国づくりへと進んでいくのであるが、文学作品としても、イスタンブル出身の教師の視点から見たアナトリア農村やそこで悪戦苦闘する教師像が描かれた作品が見られる。しかしながらイスタンブル出身の作家はアナトリア農村社会にとっては他者としての違和感を拭い去れなかったであろう。この違和感や価値観のズレを解消するために、アナトリア出身の若者を教師に仕立てる斬新な学校教育機関が発足した。そこで求められたのは、農村社会で生まれ育った生活者としての力強さと使命感をもった次代を担う若者であった。

この斬新な学校教育機関は、「村落教員養成所」(Köy Enstitüleri) と呼ばれ、1940～48年の間にアナトリア全土に21校開設された。そこから出てきた作家が50年以降農村文学を支える担い手になった。具体的には、また、その作品に関しては、「トルコ農村文学の系譜——アナトリアの生活者からの叫び——」で論じる。ここでは、1950年にマフムト・マカルによって発表された『トルコの村から』(*Bizim Köy*, 1950) についてのみ触れておきたい。この作品は、現代トルコ文学史において、そしてトルコ農村文学において、一種のターニングポイント的な位置づけにある。英語によるトルコ文学研究書等では、著者であるマカルの名に因んで、農村文学の時代区分として「プレ・マカル」、「ポスト・マカル」という用語すら用いられている。作品そのものは、読者の心を大きく揺さぶるといった内容とはほど遠い農村での日常を赤裸々に描いた手記にすぎないが、この作品は、著者マカル弱冠17歳でのデビュー作にもかかわらず、時の共和人民党政権を批判する道具として利用され、大変なセンセーションを巻き起こした。農村文学の観点からすれば、そこには、他者としての既成作家とは異なる農村出身者あるいは生活者の目線によってアナトリア農村の現状がはじめて描かれたと考えられる。

マフムト・マカルに続く形で、g) タリプ・アパイドゥン、そしてh) ファキル・バイクルトといった村落教員養成所出身作家が、アナトリア農村内部の実状について発信していく。そこでは近代化の象徴たるトラクターの導入をめぐる父子の確執、村長の理不尽な要求に立ち向かう母子の奮闘ぶりなどが描かれている。

当然ながら、農村文学の担い手がすべて村落教員養成所出身というわけではない。日本ではま

だその作品が翻訳出版されていないものの、避けて通ることのできない現代作家として、f) ヤシャル・ケマル (Yaşar Kemal, 1923-) という国民的な作家がいる。j) オルハン・パムクがノーベル賞を受賞するまでは、このヤシャル・ケマルが何度となくノーベル賞候補としてノミネートされた。代表作品は『瘦せたメメッド』 (*İnce Memed*, 1955) で、これについては、本特集の「——アナトリアの生活者からの叫び——」および石井啓一郎氏によって言及される。先にオルハン・パムクがノーベル賞を受賞したため、今年で89歳のヤシャル・ケマルが同賞を受賞するにはもう時間がないであろう。出生年はトルコ共和国建国と同じ1923年で、資料によればその前年の1922年という説もある。生年の異同はマフムト・マカルにも言え、1933年生まれと記す資料とともに、30年と記した資料も存在する。

資料による作家の出生年のズレは気になっており、機会があればぜひ本人に確認したいと思っていた。幸いマフムト・マカル本人に会う機会があり、その件について尋ねることが出来た。返答はあっけらかんとしたもので、「あなたの都合のよいほうを選んでおいてくれ」というものだった。彼の生まれた当時は、「氏姓法」(1934制定)もなく、戸籍制度がそれほど徹底していなかったようで、その受け止め方も日本人の感覚とはずいぶん異なり、何ともおおらかな感じを受けた。

さて、ここまで述べた内容から、トルコ文学は、1950年を境にその対象をイスタンブルからアナトリアへシフトする大きな潮流に呑み込まれ、それ以降はアナトリア農村文学一色になったかとの印象を抱くかも知れないが、もちろんそうではない。d) サイト・ファイク・アバスマク (Sait Faik Abasıyanık, 1906-54)、e) アズィズ・ネスィン (Aziz Nesin, 1915-95) は、どちらかと言えば、農村よりはむしろ都市に目を向け、そこで質素に暮らす庶民の人間模様を巧みなタッチで描く作家である。両者とも切れ味の鋭さが求められる短編小説家として国内外で高い評価を得ており、とりわけアズィズ・ネスィンは、風刺を効かせた作品を非常に数多く発表している。本人が亡くなる直前に自選しておいた短編集の表題作「あなたのお国にロバはいないの?」では、ロバの背に掛けた織物に目がくらんだ貪欲なアメリカ人を手玉にするトルコ人のしたたかさが彼独特の風刺を交えて実に見事に描かれている。

時期的には現代の私たちと同時代になるが、オルハン・パムクは、周知の通り、2006年ノーベル賞を受賞したということで一気にクローズアップされた作家である。オルハン・パムクのノーベル賞受賞のインパクトについては、すでに言及した。ここでは、オルハン・パムク以前における邦訳も含め日本におけるトルコ文学の受容、その全体像に関して簡単に触れておきたい。資料2<トルコ文学邦訳一覧>に示した通り、オルハン・パムクの代表作 *Benim Adım Kırmızı*, 1998の邦訳として、すでに和久井路子訳 No.12『わたしの名は紅』(2004)と本特集に寄稿していただいた宮下遼氏による訳 No.21-1/2『わたしの名は赤』(2012)が出版されている。わずか8年で新訳が出たことに対して、あらためてノーベル賞受賞に対する関心の高さが感じられる。

さて、資料2にはトルコ文学の邦訳が年代順に20点挙げてあり、管見の限りではこれ以外には見当たらない。ここからはトルコ文学の日本への受容のプロセスで1つ興味深い特徴が見られる。それは、トルコ文学が日本に始めて紹介されたころは、もっぱら詩人ナーズム・ヒクメットの詩に特化していたことである。No.03の護雅夫訳『ナスレディン物語』を除く最初のNo.01 峯俊夫訳『詩集 獄中書簡』(1956)からNo.05 中本/服部訳『ヒクメット詩集』までの4点が、いずれもロシア語を介した重訳であるものの、それに当たる。なお、No.10『フェルハドとシリン』(2002)も同一詩人ヒクメットの作品であるが、これは本特集に寄稿されている石井啓一郎氏によるトルコ語からの翻訳である。

トルコ文学の日本への受容において、初期の翻訳がこのように詩人ナーズム・ヒクメットに特化した背景には、トルコ文学に対する関心からではなく、社会主義国家旧ソ連およびそこへ亡命した詩人ヒクメットのイデオロギー的発信に対する関心や期待があったといえる。翻っていうならば、ナーズム・ヒクメットが旧ソ連へ亡命していなければ、間違いなく、彼は日本で、少なくともこの時期には、紹介されることはなかったと考えられる。

話が少し相前後するが、オルハン・パムクがノーベル賞を受賞したのは2006年10月のことで、それを先取りする形で、日本では同氏の作品が2点——No.12) 和久井路子訳『私の名は紅』(2004)、No.13) 和久井路子訳『雪』(2006)——翻訳出版されている。その数年前からパムクはノーベル賞候補の下馬評に挙がっており、藤原書店が先手を打って版權取得し翻訳したのである。その後、宮下氏らの若手翻訳者の精力的な参加もあって、わずか8年でパムク作品が8点翻訳された。日本でのトルコ文学の翻訳点数が20点であって、その内の8点であるから、全体の4割がオルハン・パムクの作品ということになる。この現象には、やはりどうしても商業ベースに乗せなければならない採算性が反映されており、それがノーベル賞受賞によって担保されていると思われる。

初期の詩人ナーズム・ヒクメットと近年のノーベル賞作家オルハン・パムクの間には、トルコ人作家がフランス語で著した作品の邦訳No.07) 大久保昭男監修『イスタンブールの女』が1点含まれるが、1980年ぐらいからトルコ語原著からの翻訳が散発的に行われている。日本におけるトルコ文学へのアクセスは、一般的には翻訳に頼らざるを得ないわけであるが、実際のトルコ文学の活動というのは、本国のトルコにおいては日本で見られるいくぶん偏向した形でなくて、極めて活発に幅広く展開されているのである。

それは、本特集の各論で、詳しく紹介されることになっている。以上で導入的な「現代トルコ文学概要」を終える。

・トルコ主要作家年表

1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1980	2000 →
~オスマン帝国 (~1922 ↓)			'23 「T. 共和国」			'50M. 民主党政権		'83 Özal 首相	'03 Erdoğan 首相
		'08 青年 T. 革命	Atatürk 大統領			'52 NATO 加盟		「82 年憲法」	'07 Gül 大統領

以下、(R) は「小説」

Halide Edip Adıvar
 1884 a) ハリデ・エディプ・アドゥヴァル (80) 1964*
 ・ 12 *Yeni Turan* (R) ・ 22 『試練』 *Ateşten Gömlek* (R) ・ 38 *Sinekli Bakkal* (R) etc.,

Yakup Kadri Karaosmanoğlu
 1889 b) ヤクプ・カドリ・カラオスマンオール (85*) 1974*
 ・ 22 *Kıralık Konak* (R) ・ 32 『よそ者』 *Yaban* (R) etc.,

Nâzım Hikmet
 1902 c) 詩人：ナズム・ヒクメット (61*) 1963*
 ・ 29 『853 行』 *853 Satır* ・ 66 『四行詩集』 *Rubailer*
 ・ 『ヒクメット詩集』 (邦訳：中本/服部 1969)
 ・ 1965 『フェルハドとシリム』 *Ferhat ile Şirin* (邦訳：石井 2002) etc.,

Sait Faik Abasıyanık
 1906 d) サイト・ファイク・アバシヤスク (48*) 1954*
 ・ 89 *S. Faik Bütün Eserleri* 『イスタンブール短編集』 (編訳：小山 1997)

1915 e) アズイズ・ネズィン Aziz Nesin(80*) 1995*
 ・ 55 *İt Kuyruğu* ・ 95 *Sizin Memlekette Eşek Yok mu?* etc.,
 『あなたのお国にロバはいないの?』

1923 f) ヤシヤル・ケマル Yaşar Kemal (89-)
 ・ 55 『灼熱のチュクロヴァ平原』 *Çukurova Yana Yana* (ルボ)
 ・ 55 『瘦せたメメッド I』 *İnce Memed I, II(69), III(84), IV(87)* (R)

[農村文学]

Köy Enstitüsü Çıkışlı
 1926 g) タリプ・アパイドゥン Talip Apaydın (86-)
 村落教員養成所出身作家
 ・ 58 『黄色いトラクター』 *Sarı Traktör*
 ・ 59 *Emmioğlu* etc.,

1929 h) ファキル・バイクルト Fakir Baykurt (70*) 1999*
 ・ 59 『蛇たちの復讐』 *Yılanların Öcü* (R) ・ 61 *Onuncu Köy*

1933 i) マフムト・マカル Mahmut Makal (79-)
 ・ 50 『トルコの村から』 *Bizim Köy* (邦訳：尾高/勝田 1981)
 ・ 76 *Bizim Köy* 1975 etc.,

1952 j) オルハン・パムク Ferit Orhan Pamuk (60-)
 < 2006 年ノーベル賞受賞 >

- ・ 82 『ジェヴデット氏と息子たち』 *Cevdet Bey ve Oğulları*
- ・ 85 『白い城』 *Beyaz Kale* (邦訳：宮下 '09)
- ・ 94 『新しい人生』 *Yeni Hayat* (邦訳：安達 '10)
- ・ 98 『わたしの名は紅；<赤>』 *Benim Adım Kırmızı* (邦訳：'04 和久井；<宮下 '12 >)
- ・ 02 『雪』 *Kar* (邦訳：和久井 '06)
- ・ 08 『無垢の博物館』 *Masumiyet Müzesi* (邦訳：宮下 '10) etc.,

トルコ文学邦訳 [市販本] 一覧 [←邦訳出版順. 2012/6/30 現在]

- 01) N・ヒクメット／峯俊夫訳『詩集 獄中書簡』（ピポ－叢書 16）国文社, 1956.1, 90 頁.
- 02) N.ヒクメット／峯俊夫訳『詩集 死んだ少女』国文社, 1958.11.15, 1976.8（再版）, 281 頁.
- 03) 護雅夫訳『ナスレディン・ホジャ物語——トルコの知恵ばなし』（東洋文庫 38）平凡社, 1965.3, 310 頁.
- 04) ナジム・ヒクメット／草鹿外吉訳『ロマンチカ』（世界革命文学選 38）新日本出版社, 1967.10, 245 頁.
- 05) ナーズム、ヒクメット／中本信幸・服部伸六訳『ヒクメット詩集』飯塚書店, 1969.4, 189 頁.
- 06) マカル、マフムト／尾高晋己・勝田茂訳『トルコの村から——マフムト先生のルポ』社会思想社, 1981.9, 244 頁.
- 07) デルヴィシュ、スアト／大久保昭男監修、飯田節子・関暢子・中井玲子訳『イスタンブールの女』沖積舎, 1990.9, 233 頁.
- 08) エドギユ、フェリット／木原興平訳『最後の授業』晶文社, 1995.11, 339 頁.
- 09) アバスヤヌク、サイト・ファーイク／小山皓一郎編訳『イスタンブール短編集』響文社, 1997.8, 309 頁.
- 10) ヒクメット、ナーズム／石井啓一郎訳『フェルハドとシリム』慧文社, 2002.9, 165 頁.
- 11) 菅原睦・太田かおり訳『デデ・コルクトの書——アナトリアの英雄物語集』（東洋文庫 720）平凡社, 2003.10, 375 頁.
- 12) パムク、オルハン／和久井路子訳『わたしの名は紅』藤原書店, 2004.11, 628 頁.
cf. No.21-1/2 ↓
- 13) パムク、オルハン／和久井路子訳『雪』藤原書店, 2006.3, 572 頁.
- 14) パムク、オルハン／和久井路子訳『父のトランク』2007.5, 188 頁.
- 15) パムク、オルハン／和久井路子訳『イスタンブール——思い出とこの町』藤原書店, 2007.7, 490 頁.
- 16) オザクマン、トゥルグット／鈴木麻矢訳、新井政美監修『トルコ狂乱——オスマン帝国滅亡とアタテュルクの戦争』三一書房, 2008.7, 808+53 頁.
- 17) オズカン、セルダル／吉田利子訳『失われた薔薇』ヴィレッジブックス, 2009.5, 262 頁.
- 18) パムク、オルハン／宮下遼・宮下志郎訳『白い城』藤原書店, 2009.12, 259 頁.
- 19) パムク、オルハン／安達智栄子訳『新しい人生』藤原書店, 2010.8, 339 頁.
- 20-1) パムク、オルハン／宮下遼訳『無垢の博物館』（上）早川書店, 2010.12, 381 頁.
- 20-2) パムク、オルハン／宮下遼訳『無垢の博物館』（下）早川書店, 2010.12, 409 頁.
- 21-1) パムク、オルハン／宮下遼訳『わたしの名は赤』（上）早川書店, 2012.1, 431 頁.
cf. No.12 ↑
- 21-2) パムク、オルハン／宮下遼訳『わたしの名は赤』（下）早川書店, 2012.1, 444 頁.
cf. No.12 ↑